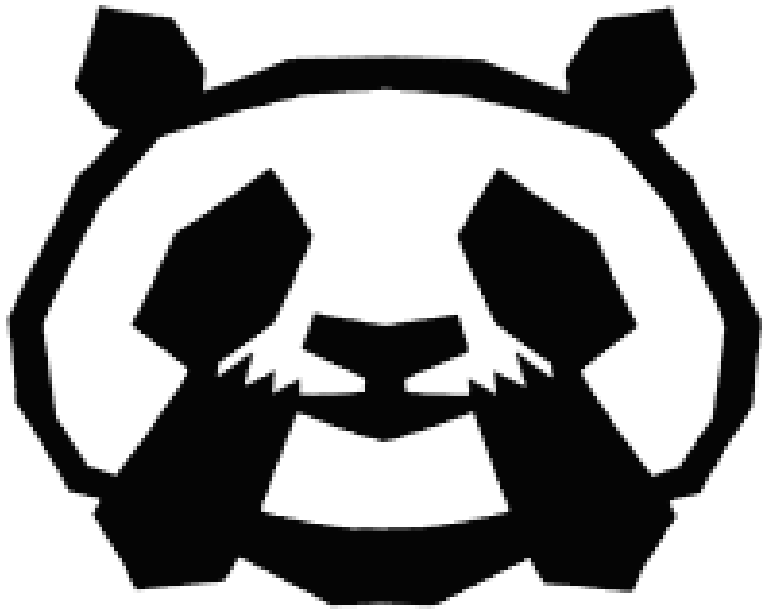


I 部



はじめに

- ・はじめに
- ・プログラム内容紹介
- ・メンバー自己紹介

Foreword

Charin Polpanumas

Three Blind Men and an Elephant is a famous Chinese parable originated in the Han dynasty. It tells a story of three blind men, who in an attempt to identify how an elephant looks like touched its three different parts, and thus recognized the animal as three different things. Our research about China bears much resemblance to the ancient tale. From independent researches, academic discussions and interviews with several professionals, we endeavor to picture an elephant called China. In essence, the whole experience has been not about perfection but perception; it has been about ascertaining what we thought we knew, encountering what we did not, and rediscovering that our common sense is sometimes exactly the opposite of what really is.

In spite of much obscurity pertaining to the People's Republic, we could at least have the faintest idea about its miraculous economic growth and its impacts on the Chinese society, or so we had assumed. Although the average double-digit growth is open information, witnessing the towering skyscrapers and the industrial people from across the world swarming the financial capital took the statistics to another level. The impact extends deeper when we met our Chinese counterparts. The educational statistics we explored had suggested a more work-oriented, aspiring generation of college students. What it forgot to mention is their inexhaustible energy and amazingly broad global perspective. Since the very first few days, the trip kept adding new dimensions to what we knew.

After a semester of research and preparation and an intense week of field work, one might expect we would at least be more knowledgeable about China than we were before; however, the reality is the more we indulge into the topic, the less we thought we knew. The past decade attracted questions about business opportunities in China. Nevertheless, interviews with Japanese firms based in Shanghai exposed the questions as misleading. The huge customer base also means an extremely fierce competition. We learnt how the most prestigious brands strive to maintain their philosophy despite the most meager of market shares. At times, we even felt the entrance into the Chinese market is more of a necessary evil than a golden opportunity. At the end of the day, it was a piece of information that could only be acquired through real-life story.

We went into this overseas research with certain perception about China's unique systems, but our belief was soon put to shame by its stark difference with reality. Despite its image as hard-headed bureaucracy, Beijing left an open-minded and flexible impression. Whereas western media tend to lambaste China's reluctance to liberalize the financial system, the policy makers stated it as their foremost priority. Whereas Japanese media reiterate historical conflicts, their Chinese counterparts emphasize on mutual cooperation. And again, our perception was challenged.

In nutshell, this report is a recollection of the changes in our perception. It traces our journey from the preparation and research about the Chinese socioeconomic ecosystem as an outsider to our encounter with the reality and how we coped with the disparities.

はじめに

Charin Polpanumas, ゼミ幹事

中国漢の時代から伝わった「盲目の男たちと象」という寓話がある。象の形を把握しようと、盲目の男たちがそれぞれ象の異なった部分を触って、全く別々の生き物かのように各自が述べたという昔話である。我々の今回の中国短期海外調査によく似た話である。我々は自主研究、学術的討論、現場のプロとの面談などを通して、「中国」という像を描こうとした。調査を終えて得られたものは完全性ではなく、新たな認識である。知っているものを確かめ、知らないものを求め、知っているのだと思った常識を引っ繰り返される、そのような濃厚な時間だった。

いくら中華人民共和国が謎めいた部分を秘めているとしても、自主研究を通じて、この国の奇跡的な経済成長とその影響に関して少なくとも概要を把握できるであろう。我々はそう思っていた。しかし、いくらこの十年間平均二桁の成長率を達成している国だと頭で分かっている、上海の摩天楼や世界中から集めた実業家に圧倒されるばかりだった。特に、同世代の大学生との出会いが衝撃的だった。いくら調べた教育に関する統計から教育熱心の世代を想像できても、実際そのグローバルな視野と絶えないエネルギーを併せ持つ同世代をみると悔しくて仕方なかった。初日から知っているものに新たな次元を加える旅だった。

一学期間の準備と濃い一週間の調査で以前より中国のことを分かっていると期待されるかもしれないが、実際中国のことを知れば知るほど実は何も知らないような気がしてきた。この繁栄した十年間によって、中国はビジネスの機会と同意語かのように称えられてきた。しかし、上海の日系企業との面談はその誤認を指摘している。中国は最大の顧客ベースを持つ傍ら、最大の競争力を持っているといえよう。その厳しい環境の中、強い理念を持っている一流企業でも市場占有率を獲得しようと苦戦していることが分かった。中国市場は金の卵ではなく、免れない必要悪のように感じることもあった。結局、現地でしか感じ取ることができない実話に教えられるばかりだった。

我々は事前に創られた中国の独特な諸制度に対する印象を持って、この調査に参加したが、実践を終え間もなくその大部分が現実との差に吹っ飛ばされてしまった。頑固な官僚社会とは裏腹に、北京の政策当局者は柔軟かつ広い視野をみせてくれた。マスコミに金融自由化を不本意に批判される一方、政策当局者はそれを第一の目的として働きかけている。日本のマスコミが反日感情を訴えている一方、彼らは両国の利益のため相互協力を強調している。ここでまた我々の認識は試されるのだった。

強いて言うなら、この報告書は我々の認識の変化を記録するものである。全くの部外者という観点の自主研究から始めて、それから得られた知識を現実につづけ、そこで生じた認識の違いに対応するまでの道程を辿り着けるような回顧録だ。

プログラム内容紹介

▼ 概要

本調査は、学部学生を対象とした途上国経済の実態や開発援助・国際協力の実情に関する授業等の拡充を目指し、平成 21 年度より実施されている「地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラム」の一環である。JICA との連携をもとに、海外に関する「現場感覚」を備えた学部学生を育てて行くことを目的とし、新しい知識や機会を提供するオープンな参加型の教育プログラムである。

平成 23 年度の海外調査は、人口約 13 億人、世界第 1 位の人口を持ち、順調な経済発展を進めてきた東アジアの大国、中国について、日系企業からのヒアリングや、工業団地の実地調査、中国政府機関及び国際機関の中国事務所への訪問、現地の学生との討論会などを行い、中国経済の変化や、地方レベルでの外国直接投資・インフラ整備への取り組みと今後の展望を調査することを目的に実施された。（募集対象：一橋大学 全学部学生、募集人員：10 名）

▼ 選考プロセス

・書類選考（5月9日締切）

志望動機や自己アピールに加え、これまで受講した開発経済学関係の授業や個人の関心分野について記載。

・面接試験（5月第3週）

書類選考の内容をベースに、具体的な志望動機や今プログラムで達成したいこと、参加への意気込みについて約 30 分の試験が行われた。現地でのコミュニケーションに必要な英語での質問もあり。

▼ 準備ゼミ（5月27日～9月9日）

各種機関訪問と復旦大学とのディスカッションに備え、ゼミ形式での勉強会を実施した。

機関訪問に関しては、その活動概要を押さえることに加えて、近年論点となっている事項に対してメスを入れることを意識しながら質問作成とその精査を行った。また、復旦大学とのディスカッションのために、3-4 人のグループを形成し、各グループで設定したテーマを掘り下げ約 20 分間のプレゼンテーションを作成した。

また、一橋大学 佐賀裕実先生から英語プレゼンテーションについてご教授頂き、一橋大学中国交流センター代表志波幹雄氏からは「中国はどこへ行くのか」というテーマの特別講義をして頂いた。

▼ 報告書作成（帰国後～2011年11月）

帰国後、今海外調査に関する報告書の作成を開始した。私たちが得た経験や学びについて、このプログラムを様々な形でご支援頂いた方々に説明することで感謝の意を示すと共に、報告書を介したコミュニケーションが各方面で生まれ、より発展した学習効果へ繋がることを期待している。

また、国際経済分析者の養成というプログラムの大目的について、次年度以降の参加学生達が今プログラムを参考にしながら考え行動してくれることを願い、報告書という形で次代に伝えることを意識した。

なお、研修中に大変お世話になった劉群先生(経済学研究科特任講師)、蔘沼宏一先生(経済学研究科科长)から寄稿文を頂いたので、合わせて掲載している。

▼ 調査日程表 (9月11日~9月18日)

(以下、訪問先企業・機関の敬称略)

	年月日	都市名	時間	内 容
1	9/11 (日)	成田 発 上海 着	12 : 35 15 : 05 17 : 20 夜	成田国際空港集合 空路、上海へ(直行便) 上海浦東国際空港到着 夕食後、ホテルチェックイン
2	9/12 (月)	上海	午 前 午 後 夕 刻	上海市内見学 復旦大学との討論会 復旦大学との夕食会
3	9/13 (火)	上海	午 前 午 後 夕 刻	日系企業 [松下能源上海有限公司] 日系企業 [三井住友銀行] 夕食(如水会上海支部との食事会)
4	9/14 (水)	蘇州 北京	午 前 午 後 18 : 30 21 : 05	蘇州工業園區日系企業 [日立] 市内見学、実施調査 [蘇州工業園區] 国内線にて、空路、北京へ 北京到着
5	9/15 (木)	北京	午 前 午 後	IMF 中国事務所 訪問 JICA 中国事務所 訪問
6	9/16 (金)	北京	午 前 午 後 夜	人民銀行 訪問 財政部 訪問 夕食(如水会北京支部との食事会)
7	9/17 (土)	北京	終日	市内見学(天安門広場、故宮博物館、万里の長城)
8	9/18 (日)	北京 発 成田 着	9 : 25 13 : 55	北京首都国際空港到着、搭乗手続き 成田国際空港 到着

😊メンバー自己紹介😊



◎メンバー自己紹介◎

※ 1. プログラムへの応募理由 2. 参加前の中国への印象

Charin Polpanumas

経済学部4年/幹事

1. タイから来た留学生で、ゼミではマクロ経済を専攻として勉強している。中国経済は奇跡的な経済成長という凄まじいエンジンと格差やインフレなどという致命的な設計問題を併せ持つレースカーのような存在だと考え、その実態を肌で感じたいと決意した。参加する際、中国経済は発展途上である分、典型的な経済理論に適しないことを承知し、その不完全な世界で如何に最善の政策を繰り出すかを期待していた。



2. 強いというなら、中央政策当局がすべてを管理する謎めく官僚制国家だと想定していた。一目で見て効率を最大化されていないように見えるが、経験してみるとそうせざるを得ないように見えなくなかった。

飯山聖基

商学部4年/副幹事

1. 世界のパワーバランスに大きな影響を与え、新時代を築くであろう大国の黎明期に触れることで、国際社会に対する新しい視野を得たかった。特に本プログラムは、中国全体を俯瞰して眺めている政府機関や、日本人として中国を捉えている日系企業を訪問できる事に魅力を感じた。



2. 臥薪嘗胆の異端児。大国の歴史と文化、特異な政治体制から生み出される哲学や諸政策は、先進諸国には理解し難いものであり、同時に中国もその体制を理解されようという姿勢に欠けている。確かなマーケットポテンシャルを秘めると同時に、多くの課題も抱えたアジアの大国。

内野 琢郎

商学部4年/カメラ係、編集委員

1. 中国短期調査の目的(志望動機)は、大きく二つあり、まず一つ目が「日中における経営の相違点の把握」で二つ目が「中国の市場や文化、また教育レベルを肌で実感する」ことです。



2. 箇条書きにさせていただくと

・物価が安い。 ・貧富の差が激しい。 ・中国の政府機関が強情で冷静な組織運営ができていない。

以下は中国人に対するイメージ

・交通ルールを守らない。 ・ハングリー精神があり良く勉強をする。 ・自己中心、合理主義的。

津覇ゆうい

社会学部4年 / 編集委員

1. 開発協力の仕事を志望しており、成長著しい中国とその発展に関わる政府関係者に会うことは刺激になると思った。
また、就職活動を経て、不景気の世界に初めて真正面からぶつかった。高度経済成長を続ける中国で好景気とはどういったものか自分の目で見たいと感じた。
2. 戦略的に成長の道を探っている。自国の成長を信じて邁進する一方で、国際政治の場での役割意識がその規模に比べて小さい。



兼国 彩香

社会学部 3 年 / 企業連絡係

1. 海外の文化に触れる経験をしたいと思っていたとき、このプログラムを知りました。プログラムの内容が非常に魅力的で、旅行ではできない経験ができるのではないかと思います。
2. 高校生のころに香港に行ったことがあったので、香港のイメージがそのまま中国のイメージでした。活気があつて高層マンションやビルが立ち並んでいて、街並みがきれい。福岡に住んでいたころよく光化学スモッグ注意報が出ていたので大気汚染が激しいのかなとも思っていました。



朱 青

経済学部 3 年 / 経済班リーダー

1. このプログラムを知ったのは、引率教員の劉先生の紹介がきっかけだった。一週間の海外調査で、地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラムを聞いて、興味が湧いた。私は中国出身だが、上海と北京に行くチャンスはめったにない。こういう日本人の学生と一緒に中国に行き、第三者の視点から発展中の中国を肌で感じ、客観的に評価し交流できるのは、貴重なチャンスだと思い、応募した。
2. 近年中国はすさまじいスピードで経済成長を果たしているのは事実だが、一方でその高い GDP 成長率に貢献しているのは過度な資源開発や、環境への配慮が欠けること等だ。最近、「高鉄追突事故」みたいな重大事故の発生に伴い、その背後の官僚問題、政府行政の不透明問題等も顕在化している。



1. プログラムへの応募理由
2. 参加前の中国への印象

中尾実貴

法学部 3 年/学生連絡係、編集委員長

1. 図らずも中国人の友人を持つ機会に恵まれた大学生活を送り、一方で国際関係を専門に勉強する中で、かねてから日中間の個人的な友好関係と、国家的な外交関係の差に興味と疑問を抱いていました。実際に中国に行くことで、何かヒントが得られるかと思い参加を決めました。

2. 日々近代的な都市(特に上海)の写真を目にしたり、実際中国人の友人から、「帰省するたびに国が変わる…」と聞いていたり…目に見える形でどんどん発展しているのだらうと思いました。同時に、中国が自国を未だ「発展途上国」と呼ぶことが実感として腑に落ちず、その文脈で問題となる国内格差の実体がどのようなものか、漠然とした印象しか持っていませんでした。



豊田 芙生子

社会学部 2 年/開発援助班リーダー

1. この調査に参加することで、自分の目で現場を見て、関係者のお話から多面的な開発の実態への理解を深めるとともに分析を行うことで、今後のキャリアに役立つ分析力を身につけることができると考えました。また学部を超えたゼミ形式の勉強会を行うことで、通常の授業では得ることのできない成果をあげられると感じたと同時に、自分にはないものの方角をまわりの人から学びたいと強く思っていたため、この海外調査を志望しました。

2. 日々報道される中国の経済成長のニュースから、中国が国際社会の中で大きな影響力を及ぼす国家になっていると感じていました。しかしその一方で、中国の戸籍問題や格差問題について学んでいたため、法制度や社会制度といった面では多くの問題を抱えているという印象を持っていました。



平川星座

経済学部2年/カメラ係、旅程管理係

1. 中国は多方面で圧倒的な存在感を放ち、中国なしでは、世界、日本は語れません。私は中国にこそ自分の将来の扉を開ける鍵があると確信していました。しかし中国に関して、実際には何も知らない自分がいることに気がつきました。その様な中、このプログラムを知った時、「これしかない！」と感じたわけです。ほんの一部でも中国を見てみた

い、自分の「これから」を考えるきっかけになれば…！と思い、説明会に参加しました。

2. “未知の世界”。頭に思い浮かんでくるのは“可能性を秘めた市場”“エネルギー資源”“環境”“格差”“外交”…などの活字だけ。現地の人々や雰囲気、音、においなどを想像する時は、まるでブラックボックスを探る感じでした。



※ 1. プログラムへの応募理由 2. 参加前の中国への印象

油谷さやか

社会学部2年/旅程管理係

1. 高校生の時に家族旅行で台湾を訪れたことから、東アジアの国際関係や東アジアで日本の立ち位置について考えるようになりました。

そこで、成長著しい隣国の中国を経済的側面から研究したいと思い、

このプログラムに参加させて頂きました。また中国と日本の関係は、

経済的結びつきは年々強まっているものの、政治的、人々の意識的

にはそれほどいいとは言えません。それは私が日本にいて、日本の

メディアでは反日感情など中国の負の側面が大きく誇張されて取り上げられるからそう思うのかもしれませんが、

だからこそ、実際に現地の空気に触れ、自分の目で見てみたいと思ったのも応募した理由のひとつです。

2. 調査前の中国のイメージは、経済大国と社会的問題の多さという2つの言葉に集約されます。まずは 2010

年度、日本が 42 年間守ってきた GDP 世界第二位の座を中国に明け渡したことには、日本人として大きな危機

感を感じました。しかしその一方で、たくさん社会的問題が報道されているのも事実です。この調査の直前にも

高速鉄道脱線事故があり、私たちの上海北京間の移動手段は夜行列車から国内線飛行機に変更されました。

1週間という短い期間ではありましたが実際に現地に調査に行き、この2つの矛盾した要素を抱える中国の実態

がどうであるのか少しでも確かめることができればなと思いました。



劉群(Ryu Gun)先生

みんなからひとこと^^

プレゼン時は鬼の如く睨みつけ、時には学生に劣らない程はしゃぐ

多面性溢れる先生。(charin)

リ: 理知的で ユ: ユーモア溢れた ウ: ウルトラティーチャー (飯山)

しっかりしているようで、天然でもある一粒で二度おいしい先生(内野)

自分らしく生きる強さと周りを包む優しさを持っていて素敵。(津覇)

食事の時、旦那さんとの幸せそうな2ショットを

見せていただけました^^(兼国)

温厚で親しみやすく、先生というより友達のようにいつも面倒を見てくれる人。(朱)

面倒見良い母/相談役の姉/お茶目な妹要素、全てを備える先生。極め付けに…美人！(中尾)

厳しさを持ちつつも優しく無邪気な、先生としても女性としても尊敬する人です。(豊田)

劉先生はとてまパワフル！そして愛が深いお方！私の、理想の女性像です☆(平川)

お茶目で素敵な先生です！たくさんのアドバイスやお話ありがとうございました。(油谷)





BUBBLY!

図解で分かる！バブリーな上海

1. 一国に匹敵する経済規模、購買力平価 GDP でみる



上海
(\$233 billion)



デンマーク
(\$202 billion)



フィンランド
(\$187 billion)



ニュージーランド
(\$118 billion)

出所: International Monetary Fund. Pricewaterhouse Coopers.

2. 人口最多数を誇る都市



上海
(19 million)



デリ
(18 million)



ソウル
(10 million)



ニューヨーク
(8 million)

出所: Geohive

3. エネルギー消費量、一人当たりトンの石油に相当単位でみる



LA
(2.8 tons)



香港
(2.4 tons)



上海
(2.16 tons)



パリ
(1.28 tons)

出所: Salat, Serge. Rep. Urban Morphologies Laboratory CSTB

4. 世界12位の物価水準 (ニューヨークを100とする)



東京
(143.7)



ニューヨーク
(100)



上海
(95.2)



ドバイ
(90.1)

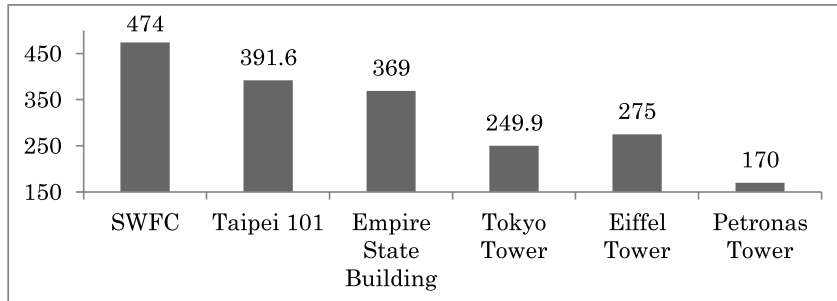
出所: Mercer.2009

5. 最大級の摩天楼を誇る都市、150m以上のビルでみる



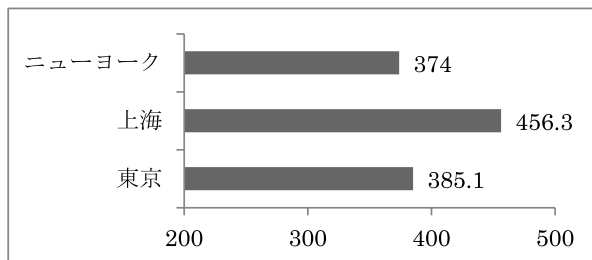
出所：CTBUH

6. 世界最高の展望台(m) Shanghai World Financial Center (SWFC)



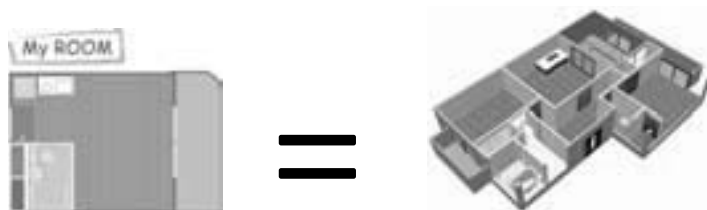
出所：CTBUH

7. 世界最長地下鉄総営業キロ数



出所：SWFCのプレゼンテーション

8. 超高級街の恐ろしい地価、上海の南京路



南京路の6畳の1K
21万円/月

東京の3LDK
20万円/月

出所：Cushman & Wakefield.



9. 上海最高級住宅、600m²のユニットが約1,960万ドルで販売された



=



1 ユニットの TOMSON RIVIERA
出所: PropGoLuxury

約 370 個の東京の 1DK

10. 2010年上海万博の規模、会場面積でみる



上海万博
(5.3平方キロ)



モナコ
(1.95平方キロ)



2008年サラゴサ万博
(0.25平方キロ)

出所: letitflow.com

11. 世界最多忙の港、コンテナ取扱量 TEU 単位でみる



上海
(29.05)



シンガポール
(28.55)



釜山
(11.9)



ロッテダム
(9.7)



LA
(6.7)

出所: Straits Times.2010

12. 超大富豪の集まり、純資産 10 億ドル以上の人でみる中国



米国
(412)



中国
(115)

ドイツ
(52)

日本
(26)

出所: Forbes Magazine

